

# みんなの民放史

題字 中川 順

## 『日曜洋画劇場』誕生秘話

知識洋治 (EX・KKB)

「おい君！編成はいつたい何考えてるんだ。映画館でやったものをテレビでやって、誰が見るんだ。そんなみっともないこと、俺は絶対許さんからな！」

1966年夏の盛りのある日、入社4年目、新米編成部員の私は、ある役員につかまって頭ごなしにこう怒鳴られた。

この年の初め、編成課長に就任した吉田治雄（1935～1995）から「これからお前と会社の運命を左右するような大仕事にとりかかる。失敗は許されないので俺がいいと言うまでは絶対に口外するな。しっかりこれを読んでおけ。」と分厚い資料を手渡された。



筆者 吉田治雄 長嶋茂雄  
ビッグスポーツ賞表彰式会場で

この男、高崎高校から東大に進み、野球部のエースとして長嶋、杉浦など名選手が活躍した六大学野球全盛期に7勝を挙げた猛者。NETテレビ（当時の社名）第1期生として入社、おまけに東映社長、大川博の女婿というエリート中のエリート。怖いものなしの傍若無人ぶりで、社内ではやや遠巻きに接する人が多かったが、なぜか私には優しくかった。

鹿児島島の山奥で生まれた愚鈍な田舎者の私はおだてて木に登らせただけで、60歳の若さで夭逝、葬儀では長嶋さんが心に染みる弔辞を述べた。

渡された資料はうんざりするほど横文字だらけ、辞書と首つ引きで何とか読み下すと、それは日本のテレビ界で初めて外国の劇場映画を、ゴールデンタイムにレギュラー編成しようとする画期的な企画書だった。

内容はアメリカの3大ネットワークが、いかに劇場映画の放送に力を注いでいるか、購入できそうな作品リストとその価格、アメリカでの実績に基づく予想視聴率、スポンサー獲得の見通しなど事細かく記されていた。

日本のテレビは皇太子（現・天皇）のご成婚で爆発的に普及し、

東京オリンピックでカラーテレビが注目され始めたと言われる。このころ映画を凌いで娯楽の王座に就こうとしていた。またマスメディアとして大きな力になりつつあり、広告費の分野でも活字媒体に迫りつつあった。

開局以来テレビ朝日は30分もの60分ものの外国テレビ映画の放送に力を注いでいた。それは開局時から放送分野の総責任者として辣腕を振るった松岡謙一郎副社長（1914～1994）の人脉を駆使し獲得したもので、『ラミィ牧場』『ローハイド』『アンタッチャブル』など一世を風靡した人気番組をご記憶のむきも多い事だろう。

外務大臣を務めた松岡洋右の長男で、東大と海軍士官学校とエリートコースを歩み、劇団四季のミュージカルやテレビドラマ『李香蘭』にも登場する華やかな青春時代を送り、英・仏など語学堪能な国際派で海外のテレビ事情にも精通、一歩も二歩も先を見据えた発想で会社を引っ張っていた。この劇場映画編成も松岡副社長の構想を実現する特別なプロジェクトだ

った。

アメリカでは既に 61 年に NBC、62 年 ABC、そして 65 年には CBS と、3 大ネットワークすべてが劇場映画の放送を開始しており、その視聴率競争は熾烈をきわめていた。作品の購入競争は会社の株価をも左右し、経営トップの命運にかかわることすらあった。

特命を仰せつかった私は早速社内調整にとりかかった。外画部と

の購入作品の選定、営業部のセールス状況の把握、放送時間設定のためのネットワーク作業などなど、気の遠くなるような煩雑で膨大な作業が待ち構えていた。しかも社内でも限られたメンバーにしか知らされていない極秘の作業で、慎重かつ注意深さが要求される。重大任務ではあったが、それだけに新米社員の私には胸の躍るような仕事でもあった。

### ◇放送時間◇

「お茶の間を映画館に」というコンセプトだから放送枠は当然週末が理想、この頃はまだ週休 2 日ではないので、土曜ヨルが第一候補となる。当時テレビ朝日は大阪の毎日放送（MBS）とネットワ

ークを組み、ゴールデンタイムの放送時間も分け合っていた。土曜ヨル 9 時は MBS の持ち枠で外国テレビ映画『ハワイアン・アイ』を放送、そこそこの視聴率もとっており、この時間を譲るはずはなからうと交渉は困難が予想されたが、代替枠日曜ヨル 9 時との交換、半年後の原状復帰などの条件で、思いのほかすんなりと交渉はまとまった。

### ◇作品選定◇

私に渡されたレポートには MGM はじめ洋画各社の購入可能な数 10 本の作品名が記されていた。学生時代のサークルで映画研究会に籍を置いていた私には、宝の山に足を踏み入れたような気分。しかも 1 本あたりの購入価格は 3、000 ドルから 5、000 ドル、1 時間もののドラマ製作費より安い。後発局にとっては「家貧しくして孝子願わる」。

その後テレビ朝日の成功に刺激され、各社が洋画のレギュラー編成に乗り出す。67 年フジテレビ、69 年 TBS、72 年 NTV と、相次いでゴールデンタイムでの放送を開始した。需要が増えれば価格は高騰、良い思いができるのも長

くは続かなかった。



仔鹿物語

放送第 1 回の作品をどうするか、その番組の将来を決定づける重要事項である。購入済の作品から 10 数本をリストアップしてもらい、社内の然るべき人たちの意見を聞いて回った。その中で最も票を集めたのは『仔鹿物語』、やはり誰もが知っているヒット作品だからだろう。しかしながらこの番組は大人の視聴者がターゲットであり、スポンサーや代理店の意向も同様だった。そして記念すべき第 1 作は『裸足の伯爵夫人』に決まった。

「それでは貴方はこの中でご覧になった作品がありますか？」  
怒鳴られムツときた私は、大事に

持ち歩いていたりリストをついつい見せてしまった。



裸足の伯爵夫人



「俺は映画館なんかには行かないよ」と言いながらこの役員、さつさと紙片をポケットにしまい込んだ。……数日後

「君イあの映画ナァー、行けるかもしれないんよ」

ご家族から大好評だったらしい。第 1 回の視聴率が出るや否や「ソレ見る、俺の言ってた通りだろう！」



この世界、すべからくこうでなければ出世できないのかもしれない。

### ◇吹き替え◇

『ララミー牧場』『ローハイド』『アンタッチャブル』など外国テレビ映画はすべて日本語に吹き替えて放送し、何の違和感もなかったのだが、社内の一部に吹き替えに異を唱える人が現れた。とくにマニアックな映画ファンは強硬だった。「ゲリー・クーパーはあの声でなきゃダメ」「マリリン・モンローはモンローの声でなきゃ許さない！」などなど。私は字幕放送での視聴率面での不利、吹き替え技術のすばらしさなどを述べ、根気よく説得にあたった。

ゲリー・クーパーの黒沢良、マリリン・モンローの向井真理子など、本人が日本語をしゃべっているのではないかと錯覚するほど、完成された一つの芸の域に達していた。

吹き替え作業においてもララミーやローハイドで培われた技術が発揮された。作品は外国での放送を前提に作られていないので、SE(効果音)のテープなどついていない。馬車や蹄の音、鞭のうなる

りや拳銃の発射音、映画に胸躍らす大切な要素だが、本編を凌ぐ出来栄に感服した。

翻訳者もこの世界の一流どころが顔をそろえ、外国語の発音と日本語の口の動きがほとんど同じになる名人芸はさすがだった。

### ◇淀川長治登場◇

『日曜洋画劇場』といえば淀川さんの流暢な名解説を思い浮かべる人が多いことだろう。だが企画段階では「最初に淀川さんありき」ではなかった。

当時のテレビ朝日は「日本教育テレビ」の社名が示す通り、全放送時間の50%以上の教育番組、30%以上の教養番組を放送するよう義務付けられていた。そして毎月、番組表を「教育」「教養」「娯楽」に色分けし、その理由を書き連ね電波管理局に報告書を提出しなければならぬ。『木島則夫モーニングショー』のあと昼ニュースまでは学校放送番組。しかしこれだけではとても50%には達しない。月末になると担当者は苦吟の連続。「解説」があれば超娯楽大作も教育番組として報告しやすいというのが理由の一つである。

解説者について私は淀川さんをベストとは考えていなかった。映画評論家としては、例えば黒澤明監督作品の盲目的な礼賛ぶりなど大いに疑義のあるところ。私は『どですかでん』(70年東宝)以後の黒澤作品を全く評価しない。

だがララミー牧場での「西部こぼれ話」は大人気で『ニギニギおじさん』は茶の間の人気者になっていた。社内の圧倒的な支持は淀川さん、スポンサーも大賛成、そしてこの起用は『日曜洋画劇場』成功の大きな要素となった。

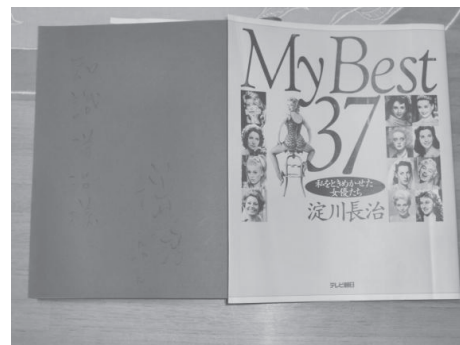
淀川さんほど洋画をお茶の間になじませ、家庭と映画を近づけた人はいないだろう。

淀川さんの解説で、私にとって「目から鱗」の出来事。それは『太陽がいっぱい』の解説を聞いたときだった。

「アラン・ドロン演じる主人公トム・リプレイが、いままさに完全犯罪を成し遂げたと確信し『太陽がいっぱい』とつぶやいたそのとき、沖合を黒い帆をつけた船が横切っていく。これは主人公の身の上にも間もなく起きる事を暗示してるんですねー」

私は長い間この黒い帆の船に気づけなかった。またこの映画は主人公のトム・リプレイと富豪の息子フィリップのホモの関係を描いていると唱えたが、これは彼独特の感性だろう。





サイン入り著書  
テレビ朝日出版部刊行

# ◇1966年10月1日◇

この日ヨル9時00分、『土曜洋画劇場』スタート。第1回放送の作品は『裸足の伯爵夫人』。視聴率は14・9%（ビデオリサーチ）だった。期待通りの数字で関係者一同ほっとした。

この週10月5日（水）ヨル7時30分にはジョニー・ワイズミューア主演の『ターザン』、火曜ヨル7時30分には東映時代劇を投入、第1回の10月4日は萬屋錦之助主演『江戸の名物男 一心太助』を放送、劇場映画全盛の時代を迎えた。

67年4月、かねての予定通り日曜日に移動、『日曜洋画劇場』となる。第1回は『誇りと情熱』をカラーで放送、本格的なカラーテレビ時代がやってきた。



誇りと情熱

『日曜洋画劇場』の最高視聴率作品は83年10月9日の『スーパーマン』で32・1%、最低は72年12月31日の『黄色いロールスロイス』2・3%、NHK紅白歌合戦の裏



スーパーマン

とはいえジャンヌ・モロー、シャリー・マクレーン、イングリッド・バーグマンがそれぞれ異なるタイプの女性を演じた佳作だけに残念な数字だ。



黄色いロールスロイス

## ◇寅さん登場◇

洋画番組の乱立は購入価格の高騰と高視聴率が期待できる作品の払底を招いた。そこでテレビ朝日は新しい視聴者を開拓し、番組の活性化をはかるため、81年ついに邦画を投入する決断をした。その尖兵として起用されたのが『男はつらいよ』シリーズ。

このとき私は何回かの人事異動の後、営業部に配属されていた。しかも提供スポンサーのS社の担当課。洋画劇場と謳っているてまえスポンサーはあまりいい顔はしない。淀川さんの解説もなし。『日曜洋画劇場 特別企画』として放送することになった。

邦画投入は何とか了解がとれた

ものの、予期せぬ障害が待ち受けていた。それは「とらや」の茶の間で繰り広げられる食事のシーン。そこに、あつてはならぬ他社のビールが登場していた。今ならCGで処理できるのだろうが、当時はまだそんな技術はない。山田洋次監督は作品にハサミを入れることを嫌うので有名。万策尽きたかに思えたが窮すれば通ず、ビールが登場する場面に次週予告のロールトップを流し見えにくくしようという名案。何とかピンチを脱し、4月19日吉永小百合2回目のマドンナ『寅次郎恋やつれ』を放送、26・3%の高視聴率だった。

それから10年近くたったある日、電通の友人と六本木の裏通りにある小さな河豚料理屋で一杯やっていたときのこと、話は当然仕事のことになり、寅さん放映の苦労話に及んだ。そのとき私たちの横を一人の中年男性がすーと通り過ぎ手洗いへ。一瞬二人とも箸を止め「本物だ！」

席に戻る足を止め、「お客さんがたあ、よくこの店へおいでになるんでございますか？」。渥美清ご一家水入らずの食事会のような

ったが、業界人の会話を耳にし、きわどい内容に至らぬうちにご本人の在所をそれとなく知らせておこうという行き届いた心遣いだった気がする。

### ◇ネット拡大◇

1969年4月1日、鹿児島テレビ(KTS)が開局した。それまでテレビ朝日はUHF局へのネット拡大にやや消極的だったが、CX、NTVとの3社相乗りでネットワークを結ぶことになった。

開局の応援には鹿児島出身の私が行くことになり、編成、放送分野を担当、開局を2か月後に控えた2月初め、未完成の新社屋に駆けつけた。驚いたことに建物だけではなく放送機材も不足、社員は「卒業式が終わったら皆揃う」と呑気なもの。

『日曜洋画劇場』はキー局同士のせめぎあいの末、NTV巨人戦の後ヨル9時30分からの放送となった。テレビ朝日に30分遅れの裏送りを要請したが無理、1週遅れのフィルム回しとなった。

ところがテレビネにはカラー放送ができるプロジェクターは1台、本編をカラーで放送するとCMは

モノクロでしか放送できない。ようやく揃い始めた新入社員たちと知恵を絞ったあげく、本編とCMを一つのルールにつないでしまうという、常識では考えられない荒業を用いることになった。本編に繋いである「白味」を慎重に外し、CMフィルムを挿入する。ちょうどその頃開発された粘着テープで編集するテープ・スプライサーのお陰で、素人でも何とか無難に作業することができた。

この年入社したKTSの社員たちは、教える方が頼りないせいとか、自分で考えながら勤勉によく働いた。一昨年結成された九州民放クラブ・鹿児島設立の立役者、川越一路、今村孝夫もその第一期生である。

1982年10月1日テレビ朝日の完全ネット局として鹿児島放送(KKB)が開局、『日曜洋画劇場』はKKBに移行した。

私は編成・営業の責任者としてKKBに出向(87年帰任)、開局作業というのはいつも慌ただしものだが、今回も本社屋は未完成、プレハブの社屋で開局準備は進んだ。ただ、キー局のテレビ朝日も新局応援のノウハウを身につ

け、放送部門は大勢の応援部隊が駆けつけ遺漏なく行われた。3年前鹿児島県知事に当選した三反園訓もその要員の一人だった。

しかし営業活動は応援部隊に頼るわけにはいかない。研修もそこそこにスポンサーや代理店回り、ルールブックを手渡し、いきなり試合に出すようなもので、案の定とんでもない事件が勃発した。

福岡支社に配属された新入社員から、鬼の首でも取ったかのような勢いで電話が。「局長、日曜洋画が売れました！」即刻お断りのお詫びに駆けつけた。

いま地上波では洋画のレギュラー番組が姿を消してしまった。泉下の淀川さん、きつと寂しがっていることだろう。(文中敬称略)

#### 『仔鹿物語』46年米

監督 クレランス・ブラウン  
主演 グレゴリー・ペック

#### 『裸足の伯爵夫人』54年米・伊

監督 L・マンキーウィッツ  
主演 ハンフリー・ボガート  
エヴァ・ガードナー  
ロッサノ・ブラッツィ

#### 『太陽がいっぱい』60年仏・伊

監督 ルネ・クレマン  
主演 アラン・ドロン、モーリス・ロネ、マリ・ラフォレ

#### 『誇りと情熱』57年米

監督 スタンリー・クレイマー  
主演 ケーリー・グラント、フランク・シナトラ ソフィア・ローレン

#### 『スーパーマン』78年米

監督 リチャード・ドナー  
主演 クリストファー・リーヴ

#### 『黄色いロールスロイス』64年米

監督 アンソニー・アスキス  
主演 ジャンヌ・モロー  
シャリー・マクレーン  
イングリッド・バーグマン

#### (写真協力 公益財団法人川喜多記念映画文化財団)

\*「みんなで語ろう民放史」は今回で終了します。今まで寄稿いただいた皆様に感謝致します。次号から「私の放送人生」を掲載します。